幽霊探偵団

ラフティー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幽霊探偵団

【Ｎコード】
Ｎ１８６５Ｄ

【作者名】
ラフティー

【あらすじ】
主人公の前に突然現れたトイレの花子さん、なんと学校には沢山の幽霊がいるらしい；花子さんと一緒に幽霊退治？

第一章～トイレ？の花子さん～

※この話は作者の夢がもとになっているので・・・・よく分からなかったらすみません

第一章～トイレ？の花子さん～

うちは檜神輝鬼　（ヒノカミキキ）　ごく普通の高校2年生　最近変な夢に悩んでたりする
そんな毎日が今日大きく変わった

今日もいつもと同じように部活をしていたのだが
「ねぇあれって見学者？」体育館の隅に立っている一人の少女が気になり同じバスケ部の山西ハル　通称山ちゃんに聞いたのだが
山ちゃん「見学者？どこにいんの？」
「えっあっあそこに」
山ちゃん「あれはボールだって」
山ちゃんは笑っているがボールと人間を見間違えるほど馬鹿じゃないそしてうちのなかで一つの結論がでた

（もしかしてうちしか見えてない？）

部活後うちは一人で体育館に行った少女はまだ立っていた
「誰だてめぇ？」
言い方が悪かったのか少女は答えない。うちは女のくせに口が悪いと親に怒られているし男子ともよくタイマンをする

「あっと誰ッスか？」
うちなりの敬語だ
すると少女は答えた

「トイレの花子さんってやつ？」

「Ｗｈａｔ？」

なにをいってんだこいつ頭おかしいのかと思ったがすぐに少女に見

覚えがあるのに気が付いた

「ゆめ・・・の？」

そう　最近夢にトイレの花子さんがでてくるのだ・・・・ってか顔がにすぎ；

花子さん「フフ・・・貴女ね最近私とよく交信してくるのは？」
花子さんは笑いながら話した・・・が
「うちはしてるつもしらない・・・ね」
わけが分からないが一応返事をした

花子さん「この学校・・・結構楽しそうな幽霊がいっぱいいるわね☆」

「いっぱいいるんかい！！」花子さん「フフ・・ここは昔墓地だったのよ」

「それってヤバくない？」花子さん「かなりね」
ニッコリと答える花子さん・・・笑い事ですか；！！！！
いやぁ待て学校のピンチだな・・学校ないと家にいないといけないし

「幽霊さんたちを成仏させるには？」
花子さん「あなたが一人一人の幽霊さんに話さないとね☆でも悪霊もいるみたいだけど・・・」
花子さんの表情が悪霊と行った瞬間変わった
「幽霊退治；できっかな？」

花子さん「協力するわ、あなたのこと気になるし」

こうして幽霊を成仏させるために花子さんと幽霊探偵団になることになった

.

第2章～花子さんはオカマなんですか？～

第2章～花子さんはオカマですか？～

翌日

「ん～ハッあれ？夢か？」

うちはいつものように学校にいった

山ちゃん「よっ輝鬼また馬鹿な顔してんな？」

「馬鹿じゃなくてダイヤモンドフェイスとお呼び」

うちの一言でクラスはシラけたがスルーしよう

昼休みうちは昨日のことが夢か分からず悩んでいた

「昨日、花子とか名乗っちゃってる女の子にあって・・・・てか花子さんだぁ？なにほざいて「ほざいてないぃわよ」！！？？」

今後ろから声がした？

振り向くとそこは

「男子トイレ？」

うちはトイレの中へズカズカ入っていった

まぁみんないないからいいけど

花子さん「昨日ぶり」

「・・・・一つきいていいッスか?」

花子さん「何?」

「花子さんって・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・オ
カマ?」

花子さん「死にたいの？黒笑」

「断じで死にたくないです！！！寧ろ生きたいです！！！！！」

花子さん「逝きたいのね（笑）」

「ＮＯＯＯ！！！！！！字が違いまっせ」

花子さん「たまたまですよ、ここにいるのは☆」

「（☆うぜぇ）ソウデスカ・・・・・・じゃあれかＲｉｃｅ　Ｃｏｏｋｉｎｇ　Ｍａｃｈｉｎｅ」

花子さん「それはおかま（炊飯器）ですよ」

「でっなんすか？」

花子さん「今日の放課後からやるわよ」

「What?」

花子さん「とぼけるの？」

「いいや、そんなことないが・・・まじかょ；でっまずはどうすんだ？」

花子さん「そうね・・・まずは・・・」

続く

終わり方ヒデェ

・

第3章～初登場音楽室のベートーベン～

第3章～初登場音楽のベートーベン～

「やっぱり学校七不思議とかだべ；音楽室は定番だ；」

花子さん「ふふふっさぁ行くわよ」

二人は音楽室の中へ

ガララッ

？「ジャジャジャーン」

バタン

花子さん「何してんの？黒」
「いやっ今中に・・・；」

ガララッ

？「ジャジャジャーン！閉めるなよ」

「てめぇ誰だ！！よくも人の学校に」

べ「わたくしはベートーベンさ！！！！！」

「しるかボケさす！！！」

花子さん「・・・・・」

「花子さん？」

花子さん「ウザイぁ」

ズバシャーン

（ベートーベンが殴られた音）

花子さん「さぁ成仏しなさい」
「出来るかぁ！！」
花子さん「サイスツッコミね☆お笑い向いているじゃない？」
「どーでもいいし！！！てか花子さんお笑い知ってんだ（驚き」
花子さん「しってちゃ悪い？（黒黒）」
「イエゼヒトモシッテテクダサイ；」
花子さん「なぜ片言？」
「気分ですぜ」
花子さん「逝きます？」「字が違うって」

ベ「あのう、私は無視ですか？」

花子さん「まだいたのね、とっとと逝けよ」

ベートーベン部屋の隅でのの字をかく

「あぁ！！！！！なんなんだよ！！これで幽霊は成仏出来るのかよ！！！！」

花子さん「出来るわ、出来なければ私が八つ裂きにするわ」

「花子さんがそれでいいんスカ！？」

花子さん「何か問題でも黒」

「ありありだゾ！！！！」

花子さん「幽霊探偵団！！」
「意味がわかんねぇよ」

「なぜ、シラけるんですか！！！チキショーオイラはこの世のすべてを信じないぞ」

花子さん「現実逃避は止めなさい」

「何その目は哀れな子を見る目をやめんか！！！！」

.

これでおわりかよ；次回を続く

第４章～新たなる仲間登場！？その名は・・・～

第４章～新たなる仲間登場！？その名は・・・～

前回の話
ベートーベンは花子さんの強制的な成仏方法で旅だった
そしてまた新しい幽霊を助けるべく
学校を進む・・・が

花子さん「あ～暇ね」

「あんた本当に幽霊かよ。なぁ答えてくれ」

花子さん「良い子は真似しないでね☆」

「☆ウゼェ！！！ふざけんな！！！」

？「そうだそうだ！！！」

「Ｗｈａｔ？」

？「英語の使い方が間違ってんぞ、誰って聞くときはＷｈｏだろう？」

「そうかすまなかっ・・・・ってててめぇ誰だし」

？「またその反応？いい加減あきたぞい」

「なめんな！！！」

花子さん「あっトムじゃないの」

？「いやっトムじゃなくて擂（ライ）だから；」

「初めまして・・・ラじゃなくてトム」

ライ「言い直すなよ！！！このあまが！！！」

「あ”んだと！！！」

ギャギャギャギャギャギャギャギャギャギャギャギャギャギャギャ

ギャギャギャギャギャギャギャギャギャギャギャ

花子さん「私をスルーとはやるわね（黒）ふふふふふふふふふふ」

「「いじけて更に黒さ倍増？」」

花子さん「死ね」

ズバシャーン

１０分後

「偉大なる花子様、ライとかほざいてやがるこいつはだれですか」

ライ「あ”ぁ？」

花子さん「ライ黙れ」

ライ「はい；」

花子さん「こいつは幽霊よ、ある邪悪なものに成仏できないようにされた」

ライ「可哀相な俺」

「酷い」

ライ「お前・・・（キュン）」

「こんなうるせーやつを現世に残すなんてうちが困る！！てかウザイし、あぁくそう！！！！」

ライ「そっち！？あくまで理由はそれですか？泣」

花子さん「そしてその邪悪な幽霊は今もこの学校にいる・・・」

「「えっ？」」

私はまだ知らない

その邪悪な幽霊が

みんなを

苦しめていることを

まだ知らない

第五章～走れメロスかよ；～（前書き）

山ちゃんピンチ

第五章～走れメロスかよ；～

第五章～走れメロスかよ；～

昨日は花子さんに続きライという幽霊が仲間？になった

山ちゃん「おはよ☆」

「あぁおはょ；」

山ちゃん「どーした？」「なんか昨日つかれちまって・・・」

山ちゃん「疲れたって？」

「色々さ」

山ちゃん「ふ～ん、なんかあったらうちに言えよ☆」

「うん（優しいなぁ山ちゃんは）」

などと思っていると、事件が起きた・・・。

「きゃーっ！！！！！」

「「！！？？」」

突然女の子の声がした、山ちゃんは声の方に走り出した、うちも行こうとしたら・・・

花子さん「とうとう現れたね、」

「うぉ！！！！花子！！」

花子さん「呼び捨てですか？」

「朝からでるなよ」

花子さん「幽霊は気まぐれですから」

「とっとにかく、いってみよう」

二人は山ちゃんの後を追った

山ちゃん　「これは・・・・・・・」

「誰だ！！！こんな所で痔になったやつは！！」

山ちゃん「じじゃねぇーよ、絵の具だ絵の具！！」

沢山の生徒や先生が壁を見つめた

壁には不気味な言葉が書いてあった

この地は我の物　じゃまするものは地獄を見るだろう　我の前に沢山の紅いバラが散るだろう

悪い子は食べちゃうぞ☆

「ガチャ●ンか？」

山ちゃん「・・・・・これかいたやつは相当馬鹿らしい；」

花子さん「普通バイキンマンよね」

「・・・・；」

ツッコミきれなかった

すると、山ちゃんがなにかをつぶやいた

山ちゃん「人形がこっちを見ている」

「怖っ山ちゃん冗談は顔だけに・・・・ってうぉ！？り●ちゃん人

形が・・・渡邉君の手に」

花子さん「そっちじゃないわよ。」

「あーだよね、渡邉君はり●ちゃんマニアだから」

再び山ちゃんの方を見ると

「山寺こーいちに「なわこないぃ」ですよね；あれ山ちゃん？」

山ちゃんはみんなが壁をみているうちに一人暗い廊下を進み出した

そして奥には

外国人形

「初ホラー！？」
花子さん「やばいわ；あの子を止めて」
花子さんは突然焦りだした
「どうやって」
花子さん「走るのよ、メロスのように」
「メロスかよ！！！！」

うちは走ったメロスのうちに

「友のためさ」

メロスになりきった

.

第六章～初ホラーは黄ばみ色～

第六章～初ホラーは黄ばみ色～

「山ちゃん！！くそ生意気な人形め！！山ちゃんに手を出していい

のはうちだけだ！」

ライ「それもどうかと思うし；」

「なっライト！！なぜ」

ライ「まてまて俺はライだ；デ●ノートかよ；」

「幽霊の分際がデ●ノートを語るな！！！！」

ライ「意味わかんねぇよ」

「うちはLが好きです」

ライ「聞いてねぇ！！」

花子さん「あんなら何してるねか・し・ら（黒」

「何って・・・・山ちゃん！？」

花子さん「さっさと走れメロス」

「またそのネタ！？てかライのせいで山ちゃんいなくなったし！！！」

ライ「俺のせい」

「「ＹＥＳ☆」」

ライ「二人で言うなよ」

花子さん「とにかく探しましょう」

「あーもう！！！この学校はどぉなってんのさ！！」

先生「檜神さん？なにしてるんですか？」

「あっ先生」

先生「教室に戻りなさい、壁に落書きした人を今探してるから」

「・・・・先生・・・山ちゃん・・・・・山西さんがいなくなったんです」

先生「なんですって？誰ですか山西さんって」

「！？なっなに言ってるんですか？先生のクラスの！！！！」

先生「自分のクラスの生徒を忘れるわけないわよ、檜神さん疲れてるの？早く教室へ・・・」

「違う・・・先生じゃない・・あなた・・・誰？」

先生「・・・・・ふふっあはははは！！！！！」

花子さん「！？まずいわ・・・こいつ、あなたの先生に化けた幽霊ね；」

「じゃ本当先生は？」

花子さん「無事なことを願いましょう」

ライ「早く逃げようぜ」

花子さん「そっそうね」

「・・・いやだ」

ライ「なに言ってんだよ！！！！」

「どこの幽霊だかしらねぇが山ちゃんを帰せばかやろう！！！！！」

幽霊「あはははは」

そう笑いながら幽霊は私達の方へ走り出した、もう顔は先生の面影もなく血だらけで肉や骨がはみ出ていた

花子さん「危ない！！！！」

私はギュッと目をつぶった

しかしいつまでたっても何も起きないゆっくり目を開けると

東海林「私の生徒になにをする！！！！くらえ！！！熱血パンチ」

「熱血教師で有名な東海林先生！！？？・・・・確か複顧問だったな；」

東海林「大丈夫か檜神？」

「ダイジョバナイです」

東海林「そうか！それはよかった☆」

「・・・・プァードゥン？良くないでしょ；」

東海林「ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡしかしなんなんだこの黄ばんだ化け物は？」

花子さん「邪悪な幽霊ですよ」

東海林「そうか」

「先生花子さんと会話してる!?てか幽霊見えるんだ!!!!」

ライ「スゲェなお前の先生・・・・素手で幽霊やつけなからな」

花子さん「ふふふっ初ホラーは黄ばみ色ね」

「なんなんだよ（泣」

花子さん「さぁ先生もつれて山ちゃん探し再開よ」

.

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1865d/

幽霊探偵団

2010年10月11日02時50分発行